王冠を戴く王と王妃と賢人シンドバードと七人の大臣の物語およびそれぞれの語る物語（２）

西　村　正　身

目次〔12.aper IIと15.simia et testudo(「猿の生き肝」の類話)の２話は本書Atの固有話である〕

(五日目)
12. 妃の第四の物語（猪Ⅱ　aper Ⅱ） 2
13. 第五の大臣の第一の物語（猟犬　canis） 4
14. 第五の大臣の第二の物語（マント　pallium） 5
六日目 9
15. 妃の第五の物語（猿と亀　simia et testudo） 9
16. 第六の大臣の第一の物語（雉鳩Ⅰ　turtures Ⅰ） 14
17. 第六の大臣の第二の物語（ケーキの象　elephantinus） 14
七日目 15
18. 第七の大臣の物語（女たちの悪知恵 Ia　ingenia Ia） 15
八日目　王子が口を開く 18
19. 王子の第一の物語（三歳の男の子　puer 3 annorum） 20
20. 王子の第二の物語（五歳の男の子　puer 5 annorum） 21
21. 王子の第三の物語（盲目の老人　senex caecus） 22
物語の結び 23
写本筆写者の覚書 23

底本（アーテシュ版）の本文修正 25
底本脚注の修正と追加 26

・訳文中、＜＞内は写本にない語句を校訂者が補足したものだが、大臣たちや妃の語る物語の始めに補足された＜物語＞は、注をつけずに省いた。
・( ) 内は訳者による補足。
・底本にない段落を適宜に設けた。
・人称代名詞は適宜に省いたり、名詞に置き換えたりした。

＊　　＊　　＊

（12　妃の第四の物語　猪Ⅱ　aperⅡ）

昔々のことですが、いくつもの果樹園に囲いをして、そこで売ったり買ったりの商売をしている男がいました。（商売上手で）安心して売買ができたので、いろいろなところから人々がやって来ていました。そうした果樹園のひとつに、無花果の木が一本あり、アッラーのおかげで見事な実がなったので、男はほかのどんな木にも増してその木を大事にしていました。

ところで、毎晩、一匹の猿がその木にやって来ては、しばらくの間、木の実を食べていたのですが、日々のうちのある日のこと、その果樹園に一頭の豚がやって来て中に入り込み、周辺から食べ始めたのです。けれども夜明け前、つまり夜の終わりにしかそこへは入りませんでしたし、とても真ん中まで入り込んでいく勇気はなくて、すぐ内側や（少し）離れた木のそばに行くだけだったのです。それでもうまいごちそうにありつけて、生活は快適ですばらしいものでした。そして、木から落ちた、まだ熟していない無花果などを食べていたのですが、身の安全だけは確保しながら、そのようにしてしばらくの間、滞在していたのです。

ところが、日々のうちのある日のこと、（豚が）いつものように果樹園に入ったとき、案の定、果樹園での（豚のそれまでの振舞いが）猿を不愉快にさせてしまっていたのですが、ともかく猿と豚が出会ったのです。それでも猿は豚を歓迎しました。ある日[1)]、豚が声をかけました、「こんなところでお会いするとは」。すると、猿が言いました、「ぼくは小さいときから（ここにいて）、この場所にもよく来ているけれど、君に会ったことはないね」。豚が言いました、「ぼくもずいぶん前からこの場所にはよく来ているんだけれど、君と会ったのは今回が初めてだね」。すると、猿が言いました、「ところで、君はどの場所にいたんだい？」（豚が）言いました、「この場所だよ」。（猿が）言いました、「君の食べているものはひどいもんだね、だって、熟していないし、虫が食っているし、風で落とされた最悪の無花果じゃないか」。すると、豚が言いました、「君はどこから食べているんだい？」（猿が）言いました、「いちばん大きな実をつける無花果の木からさ。熟していて甘いものしか食べないのさ。おいしいものを食べて、傷んでいるものは投げ捨ててしまうんだ。もしぼくについて来るなら、君と友だちになるし、食べるものもやるし、いろいろと尽くしてやるよ」。すると、豚が言いました、「不安でもあり、そうしたいとも思うんだけど、君のあとについていろんな場所に行き、奥深くまで入り込んで、気づかれて殺されたりしたら、ぼくの放浪も終わりになっちゃうからね。君は渓流（ワーディー）や丘へ逃げてしまうだろ？」それを聞い

[1)]「ある日」　原文（369/16；144b/18）にあるのだが、初めて会った日と同日と考えるほうが自然なので、あるいは省くべきかもしれない。

て猿が言いました、「ぼくが木のてっぺんにいて、草原や荒野の遠くのほうを見ていてやるよ、ぼくたちのほうに向かって来る人がいたり、ぼくたちを探そうとしている人が見えたりしたら、君のところへ行って、誰かが君を見つけて、あとを追い、そばまで来ていることを教えてやるよ、そうしたら君は逃げて、洞窟とかすき間とか、別のところへ走っていける。そうすれば人間の災難には遭わなくてすむというわけさ」。猿は説得を続け、とうとういっしょに来ることを承知させてしまいました。豚に罠がしかけられたのです。

豚といっしょに例の木のところに到着すると、猿は木に登り、豚のために甘い実を摘み始めました。豚はその暮らしが気に入り、たくさん食べました。そして夜が明けると豚は猿をあとに残し、挨拶をして別れを告げ、明日になったらまた来ると約束して去っていきました。

やがて、聡明な果樹園の持ち主がその木のところにやって来て、それを見るなり、そのあまりの光景に思わず涙があふれてきました。見事な無花果の実の大部分がそこいらじゅうに落ちて、地面の上でつぶれていたのです。それを見て彼は激しく悲しみました。彼にとっては耐えがたいことだったのです。

それから、親類や友だちのところへ行って歎くと、みんなは彼を慰めて、こう言いました、「君に損害を加えるような人に心当たりはあるのかい？」彼は言いました、「いや、まったく見当もつかん」。すると彼らがこう言いました、「それじゃ、偶然のことだな。獣が遠くの草原からやって来たんだよ」。それから彼らはすぐに立ち上がって、言いました、「その場所を、ぼくたちに見せてくれ！」

そこで持ち主は、彼らを引き連れてその木のところへ行きました。その目で木を見ると、みんなは服を脱いで二ジラーア[2)]の深さの穴を掘り、軽いふたでそれを覆い、あの豚のために罠をしかけたのです。それから彼らは、願いが成就すると確信しながら、息子たちのところに戻りました。

さて、昼が過ぎ、夜が近づいてくると、あの豚がいつものように足取りも軽やかにやって来て、穴のところまで来ると、＜その中に＞落ちて首を折り、死んでしまったのです。

朝になり、その光によって輝き、明るくなると、果樹園の持ち主が友だちや親類の者たちといっしょにやって来て、豚が穴の中で死んでいるのを見つけ、アッラーに感謝してほめたたえ、ムハンマドに呼びかけて彼を祝福しました。彼は、目的を達して一安心し、みんなといっしょに息子たちのところに帰っていったのです。

「これはみんな、猿から聞いた対策が無意味だったからで、その結果、落とし穴に落ちてしまったのですわ」。

---

2)「ジラーア」 地方によって異なるが、一ジラーアは〇・五八～〇・八メートル。従って二ジラーアは一・一六～一・六メートルに相当する。

その話を聞いた王は、息子の処刑を決意した。

すると、第五の大臣が王を訪れ、御前の床にキスをして言った、「ああ、幸多き王様、信頼すべき預言者の伝承集[3]に述べられていることですが、慈悲深さは熟慮のうちにしかございません。つまり、性急さは誉められたことではないのだということなのですぞ。また、非の打ち所のない結果の中にしか称賛は生まれません。ですから、御子息のことを急がせてはならないのです。犬の飼い主が後悔したように後悔することになりますぞ」。

すると（王が）言った、「その犬の飼い主の物語[4]というのはどういうものだったのだ？」

そこで、大臣は物語った、「こういう話でございます。

（13　第五の大臣の第一の物語　猟犬　canis）

狩りの好きな男がおり、猟犬を飼っていて、その犬といっしょに獣の狩りをしていました。男はその犬をとても大事にかわいがっていました。男には息子もいて、その子に増して愛するものは何もなく、心から愛しいと思い、この上ない愛情を注いでおりました。

さて、ある日のこと、どうしても片付けなければならない用事があって、妻が外出しました。子供といっしょにいてくださいね、と頼んで、子供はその父親のもとに残していったのです。そのあと、男がまだ何もしないでいるうちにすぐ、彼を捜している王のもとから使者が来たので、男は、子供のそばに犬を残して、使者とともに出かけてしまいました。

犬が幼児のそばに寝そべっていると、突然、大きな蛇が、口をあけてまっしぐらに、眠っている男の子のほうへ近づいてきたのです。犬は蛇に跳びかかり、三つに食いちぎってしまいました。そこへ男が王宮から戻ってきたので、犬は主人を迎えに家の戸口のところへ走って行きました。口は血で汚れたままでした。それを見て、男は犬が息子を殺してしまったのだと思い込んだのです。もうまったくどうしたらいいのか分からなくなってしまい、気性の激しい男だったので、剣を抜くや、犬を斬り殺してしまったのです。それから大急ぎで家に駆け込み、子供のベッドのそばへ行きました。するとどうでしょう、子供は額に汗をかきながら眠っているではありませんか。男はそれに驚き、息子のベッドのそばに目をやりました。殺された大きな蛇が目に入りました。男は顔をたたき、服を引き裂き、早まったことをしたと後悔したのですが、後悔してももう何の役にも立たなかったのです。

---

[3]「預言者の伝承集（ハディース）」は正伝集とされるものが六つ（ブハーリー、ムスリム、アブー・ダーウード、ティルミディー、ナサーイー、イブン・マーッジャ）あるが、ここに述べられているのがどの伝承集に記されているものであるのかは分からない。

[4]「犬の飼い主の物語」は底本では次の物語のタイトルの位置に置かれているが、その内容および写本により、王の科白の一部と解釈する。「物語」のみ写本では赤インクで記されている。

「ですから、お気をつけになっていただきたいのです、王様、早まってはなりません。早まった男は、思慮分別を失ってしまって、待つことができなくなってしまったのですから。それに、とりわけ女の言うことには、誠実さも分別もないのです。女たちの欺瞞と策略につきましては、ある物語[5)]を聞き及んでおります。こういう話でございます、王様、

（14　第五の大臣の第二の物語　マント　pallium）

美しい女がいるという噂を耳にすると、必ず出かけていって、その女を誘惑せずにはいられない若者がおりました。日々のうちのある日のこと、魅力的な女がいると聞いた彼は、自分のいるところへ来てほしいと女に求めました。もちろん女は来ませんでした。

そこで若者は彼女の隣りに住む老婆を訪れて、話をしたのです。すると、老婆がこう言いました、「お帰り、あの女に望みをかなえてもらえる人は一人もいやしないからね」。それを聞いた若者は、娘のことが気になってしかたなかったものの、女のことをあきらめました。

しかし、しばらくするとどうにも我慢ができなくなってしまい、再び老婆を訪れて、もう我慢も限界なのだ、それほどこの愛は大きいのだ、と訴え、その手にキスをしながら、こう言ったのです、「この望みをかなえられるような策略を、おれのために考えてくれ、あんたの欲しいものを何でもやるからさ」。すると、老婆は若者に同情して、こう言いました、「お帰り、そして楽しみにしておいで、きっとあんたの望みをかなえてくれるような策略でその女を丸め込んでやるからね」。若者は心から感謝して別れを告げました。

そして、三日経ってから戻って来ると、老婆はこう言ったのです、「喜んで、元気をお出し！　このあたしが、あんたのために願いをかなえる策略を考え出してやったからね」。若者が言いました、「それはどういうのです？」老婆は、「娘の旦那のところへ行きなさい、織物商人をしているからね」と言って店の説明をしてから、こう言葉を続けました、「そこに着いたら挨拶をして、店にすわるんだよ、そして、旦那が頭からかぶっているマントを買って、それを持って帰っておいで！」

若者はさっそく商人の店に行き、挨拶をしました。すると、商人も若者を歓迎し、自分のそばにすわらせて、こう言いました、「何かご入り用ですか？」若者は言いました、「ええ！」商人が言いました、「何でしょう？」若者が言いました、「今私が着ているような上質のマントが（欲しいんです）」。そこで商人はすっくと立ち上がり、いくつかのマントを見せたのですが、若者は、「どれも気に入らないな」と言いました。商人が言いました、「どれがお気に入りなんでしょう？」若者が言いました、「あなたが頭にかぶっているマント

5)「物語」は写本では赤インクで記されており、底本では次の物語のタイトルとなっているが、その内容および写本により、大臣の科白の一部と解釈する。

がいい」。男は言いました、「これよりも上等ですばらしいものがございますよ」。若者が言いました、「私が気に入ったのはあなたの頭の上にあるものだけなんです、何と言っても、アッラーがそれを私の目に魅力的なものにしてくださったのですから」。そういうわけで、商人はそれを彼に売りました。

若者はそれを腕にかけて受け取ると、老婆のところへ持って行きました。老婆はそれを受け取るや、ろうそくに火をつけ、その三・四ヶ所を焼いてから、こう言いました、「お帰り、あんたがしなきゃならないことはもう終わったからね」。そこで男は自分の家に帰って行きましたが、心はもう娘への情欲でいっぱいでした。

やがて、禍をもたらす老婆は立ち上がり、マントを手に取ると商人の家に向かい、その妻のところに入っていったのです。奥さんは老婆を歓迎し、何か食べるものを出してやりました。老婆はしばらく話をしながら食べていましたが、やがて楽しい話をしてその気をそらし、彼女が気づかぬうちにマントを枕の下に押し込んだのです。しばらくすると老婆は娘に礼を言って、家に帰っていきました。

夕方になって帰宅した商人が、ちょっとしたものを食べ、ベッドで眠ろうとしたとき、枕の下が少し高くなっていることに気づいて、その枕を持ち上げると、若者に売ったマントが目に飛び込んできたではありませんか。それは彼にとっては一大事でした。あいつは女房の愛人だったんだ、と男は思い込んでしまいました。悪魔（シャイターン）が男に（そう）ささやいたのです。男は思いました、「あいつは、おれの女房が愛人だということをおれに教えるために、（わざわざ）このマントを買ったんだ」。彼は妻を呼びました。妻が来ると、彼は何が起こったのかをそのときは教えぬまま、こう言いました、「被衣（イーザール）を着て、家族のところに帰れ！」奥さんは言われた通りにしました。男は彼女を（両親の家に）連れて行き、悲しみに打ちひしがれながら（自分の）家に戻りました。

さて、老婆はといえば――アッラーが彼女に良き終末を授けたまいませんように――[6)]五日間あけてから例の若者のところへ行き、こう言いました、「今日は家をあけちゃいけないよ、あの娘を今日、あんたのために連れて来てあげるからね」。

そう言うと老婆はすぐに立ち上がり、娘の母親の家に行ってドアを叩き、開けられたので中に入って彼女に挨拶をし、歓迎されました。それから、商人の妻に挨拶をして、こう言いました、「あんたの家に行ったら閉まっていて、誰もいなかったので、あんたのことが気になったんですよ」。すると、娘は泣いて、こう言いました、「ああ、お婆さん、何も悪いことはしていないのに、夫がわたしを追い出したんです」。彼女は夫との間に何が起こったのかを語ってから、言葉を続けました、「わたしが知りたいのは、わたしがどんな罪を犯し、どんな悪いことをしたのかっていうことなんです。何か妙案はありませんか？」

[6)] ふたつの――は写本にはないが、底本に従った。

（老婆が）言いました、「お母さんと相談して、あたしといっしょにおいで。あたしにも同じようなことがあったけれど、ある占星術師があっという間に安心させてくれたもんだよ。あんたがあたしと知り合ったのもアッラーのおかげさ、ねえ、かわいそうなあんた！　とにかくあんたがあたしに話してくれたんだから、あんたの身に何が起こったのかを解き明かしてくれるよう、その人に頼んであげるよ。あんたの願いがかなうといいね、きっと大丈夫だよ」。そういうわけで奥さんが母親と相談して、老婆といっしょに出かけると、老婆は彼女を連れて、まっすぐ若者の家に向かったのです。

（若者は）彼女を見ると、喜びのあまりに理性が吹き飛んでしまいました。老婆が彼にこう言いました、「いいかい、この娘はあたしの息子より愛しい娘なんだ、どうかこの娘のために星占いをして、家を追い出された原因が何なのかを、教えてやっておくれ。お礼は差し上げますからね」。それを聞くと（若者は占星術の）本をぱらぱらと読み続けていたのですが、やがて老婆は、沐浴するための水を探しに、二人を残して出て行きました。そこで若者が彼女のそばへ行って誘ったのですが、女は拒絶しました。すると彼は、彼女よりも力が強かったので、女を押さえつけて、望んでいたものを手に入れたのです。

しばらくすると老婆が戻ってきたのですが、娘は恥ずかしくて、自分の身に何が起こったのかを話すことはできませんでした。少し経ってから若者が言いました、「今夜、星占いの結果を書いて、お香を薫き染めておきますね。彼女、旦那さんのそばにいないと輝いていないんですよ」。すると娘が立ち上がったので、老婆は彼女を連れて母親の家へ行きました。

しばらくすると若者のところに戻ってきて、こう言いました、「あの娘をひどい目に遭わせちゃったから、あたしたちであの娘と旦那を仲直りさせてやらないとね[7]」。すると若者が言いました、「どんなふうにするんだい？」（老婆は）笑って言いました、「朝になったら、あの女の旦那の商人の店へ行くんだ。旦那があんたを見たら、不機嫌そうな顔をしていますね、と教えておやり。怪しまれるようなことは何もせずに、そばにすわるんだ。そばにいても話をしたりせずに、ただすわっているんだよ。話がある、なんて言ってはだめ。そして、あたしが店の前を通りかかるから、あたしを見たらすぐにあたしにつきまとうようにして、あたしを叩きながら、こう言うんだ、『やい、この禍をもたらす婆あめ。おれはあんたに、七日間で繕うようにって、マントを預けたよな、あんたはそれを受け取ったのに、二度とおれの前に姿を見せなかったじゃないか、まるであれが欲しくてたまらなかったみたいだぞ。アッラーに誓って、裁判官の家へ行くまでは、お前から目を離さないからな。さもなきゃ、マントをおれのところに持ってくるんだ！　そのあとでおれの返事を聞け！』ってね」。

[7]「仲直りさせてやらないとね」『コーラン』四「女」二四に「（一時婚により）女たちから快楽を得たならば、所定の報酬を払ってやること」とある。仲直りさせることがここでは報酬になるということなのであろうか。

作者が言うには、老婆にすっかり乗せられた男は家を出てその商人のところへ行き、挨拶をしました。商人は挨拶を返すこともせず、心にあるわだかまりのせいで、ひと言も話しませんでした。しばらくすると、ついに老婆がやって来ました。その姿を見ると若者は彼女につきまとい、その被衣（イーザール）を引き裂いて、こう言いました、「やい、不幸をもたらす婆あめ、お前はおれからマントを受け取り、繕うからといって立ち去ったっきり姿をくらまして、二度とおれに顔を見せなかったじゃないか」。そして、教えられたとおりに叫び続け、老婆を怒鳴り続けたのです。

やがて人々が立ち止まって、こう言いました、「どうしたんだね、お婆さん？　この男があんたについて言った言葉は、本当のことなのかね？」老婆が言いました、「そうなんですがね、親切な皆さん、あたしの話をぜひ聞いてくださいな？」彼らが言いました、「聞いてやろうじゃないか！」老婆が言いました、「あのね、息子の家でつぎ当てをしようと思ってこの人からマントを受け取ったときに、ある人の家に行ったり、別の人の家に行ったり、この商人の旦那の家に行ったりして、それを忘れてしまったのさ。しかも、三日経つまでそれを思い出さなかったんだよ。探してはみたけれど、どこで落としたもんだか分からない、市場でかもしれないし、誰かに奪（と）られたのかもしれないし、家のどこかの部屋に置き忘れたのかも知れない、とにかく皆目見当がつかないんだよ。あたしだってずっと探してはいるんだけどね。お願いだから、あと三日待ってもらえないかね、きっと見つけるからさ。必ずある。さもなけりゃ、弁償するよ、アッラーによるのでなければ力はなしさ」。老婆の言葉を聞いた商人は、茫然自失して、こう言いました、「アッラーのほかに神はない。偉大なるアッラーの言うことは正しい、疑うことは何にせよ罪なのだ[8]。（だが）おかげで結果は吉と出た、神かけて女房には悪いことをしてしまった。いや、アッラーがそのマントを祝福してくださったのだ」。さらに、こう言葉を続けたのです、「婆さん、至高なるアッラーをほめたたえてくれ、そのマントならわしのところにある」。

そう言うと、それを持ってきて、広げました。そして、火で焼け焦げた跡を見つけて、ほっとしたのです。若者はマントを受け取り、老婆は家路につきました。商人は妻の父親と妻のところへ行き、彼らと仲直りをして、妻を家へと連れ戻したのです。

「ですから、ああ、王様、悪魔（イブリース）でさえ遠く及ばず、どんな賢人も族長（ライイス）も途方にくれてしまうようなただ今の策略やいかさまのことをよくお考えになってください！」

その言葉を聞くと、王はその日の息子の処刑を禁じた。

---

[8]「疑うことは何にせよ罪なのだ」　底本脚注には『コーラン』四〇・一〇とあるが、四九「私室」一五のほうが適切であろうか。「よいか、本当の信者というものは、一旦アッラーと使徒を信じたらもう決して疑いを抱いたりすることなく、己が財産をなげ出し、身命を擲（なげう）ってアッラーの道に奮闘する人のこと」とある（井筒俊彦訳）。

彼（作者）は言った[9]。さて、

六日目

になると、王妃がやって来て、こう言った、「ご主人さま、いったいいつまでご子息の処刑を延期なさるおつもりなんですか。あなたの幸せや利益のために心を砕くのにも限界があるのです。わたしの言うことを聞き入れてくださらなければ、亀が猿のことで後悔したように後悔することになるのですよ」。

すると、王が言った、「その話とは、どういうことなのだ？」

彼女は語った、「ああ、時代の王さま、次のように言われております。

＜15　猿と亀の物語＞（妃の第五の物語　猿と亀　simia et testudo）

海に島があり、木々が（繁り）、川が（流れ）、鳥が（飛び交って）いて、唯一の全能なるアッラーを称えていました。そして、ある木に一匹の猿が安住の地を見つけて、たわわに実るその果実を食べ、川の水を飲んでいたのです。

さて、日々のうちのある日のこと、木にすわってその実を食べていた猿は、木の下に亀がいるのに気づきました。亀はその木から落ちたものをみんな食べていたのです。猿はかわいそうに思って声をかけました、「この場所へは何度くらい来ているんですか？」亀が答えました、「何度も（来ていますよ）」。すると、猿が言いました、「会ったことないですね。もし会っていたら、いちばんおいしい実をあげたでしょうに。そう言うのも、あなたが哀れで、年のせいで弱々しくて、下に落ちた熟していないものや虫に食われたものや傷んだものしか食べていないとお見受けするからです」。すると亀は彼に感謝し、共感して言いました[10]、「ねえ、あなた、わたしのところに降りてきませんか、あなたと仲良くなりたいのです、友だちになってください、（いろいろと）お話ししますから、あなたもわたしに話をしてください」。それに心から共感した猿は彼のそばへと降りていき、二匹が互いに仲良くしてすわり、話をし、島の隅から隅まで歩いて回りながら、すばらしい木のそばを通るたびに猿はその木に登っては、その木のいちばんおいしい実を、友だちの亀のために、食べるようにと投げ与えてやったのです。

日が暮れるまでそんなふうに過ごしてから二匹は、その下で知り合った木のところに戻

[9]「言った」は写本では動詞の末尾一文字が赤インクで記されている。続く「六日目」も赤インクで記されている。

[10]「言いました」は写本では動詞の末尾一文字が赤インクで記されている。

りました。猿が彼に尋ねて、こう言いました、「帰る家族はあるんですか？」亀が言いました、「ええ、妻と子供たちがいます」。猿が言いました、「家族のところにお帰りなさい、そして、皆さんによろしくお伝えください！」すると亀が言いました、「ほんとうに親しくしていただき、お伴をさせていただいた[11]ので、あなたに別れを告げることは、わたしには容易なことではないのです」。そういうわけで亀は彼のそばにすわり込んでしまいました。（その日は）月の明るい夜で、二匹は夜半まで話を続けました。

やがて亀は友だちの猿に別れを告げて、家族のもとへと帰っていきました。どうしてこんなに帰りが遅いのかと問われた亀は、家族に猿のことを話して聞かせ、どんなふうにして友だちになり、親切にしてもらったのか、どれほど親密になったのかなど、ありのままを話して聞かせました。

朝になると、亀は家族を放り出して、島へと出かけていきました。友だちの猿は彼を待っていました。亀は猿のそばへ行き、互いに友だちに挨拶をすると、二匹は連れ立って例の木の下を歩き始め、見事な実を見つけるたびに猿は亀のためにそれを摘んだり、味見をしてやりました。二匹は、日が暮れるまでずっとそんなふうにして過ごし、それからすわって、夜中になるまで語り合いました。スハイル星[12]が現われると、亀は家族のもとへ帰る許しを求め、猿はそれを許しました。

亀は懸命に道を急ぎ、子供たちのもとに戻りました。猿と亀はそのようなことを幾晩か続けました。

亀の奥さんは母親といっしょにすわって、夫との間に最近起こっていることを訴えて、こう言いました、「ああ、お母さん、猿と付き合うようになってからというもの、あのひとはわたしたちをなおざりにして、わたしたちを避けてばっかりなのよ」。それはひどい

---

[11]「お伴をさせていただいた」は底本（376/18）ではbi-ṣubḥati-ka「あなたの朝食で」となっているが、写本（148a/13）によりbi-ṣuḥbati-kaと読む。

[12]「スハイル星」 西洋ではカノープスと呼ばれ、りゅうこつ座のα星で、シリウスに次いで全天で二番目に明るい星である。堀内勝「スハイル星と遊牧民」（『歴史と地理』三〇〇所収、山川出版社、一九八〇）によると、スハイル星は夏の終わりと秋の到来を告げる星である。場所によって異なるが、見え始めは九月中頃の深夜三時頃からということなので、本話の季節は秋以降で、猿と亀は深更まで歓談していたということになる。旅人の指標でもあり、見え始めのころは赤く輝いているが、冬を迎えるころには白く輝くという。酷暑の終わりという吉報をもたらしてくれるありがたくも待ち遠しい星であるとともに、この星が見え始めると棗椰子の収穫が可能になるという。『スハイル星（カノープス）の輝き』（一五世紀末）序文に「おお、そなたスハイル星よ、そなたの光はいずこまで届くのか、そなたの地平線はどこにあるのか？／いずこで輝こうとも、そなたの光は幸運のしるし」とある。斉藤国治『星の古記録』（岩波新書）によると、地平線すれすれに見えるので、東洋ではこの星を見ることは瑞祥とされ、中国や日本にも老人星、寿星として古記録があるほか、イスラーム教の開祖ムハンマドはこの星を自分の星として信仰していたという。地中海からも見えるようで、ルーカーヌス『内乱（パルサリア）』８・181（Loeb Classical Libraryによる。岩波文庫の大西英文訳では８・200）で言及されている。

と思った母親が言いました[13]、「お前の言うことが本当なら、どうあってもその猿に策略をしかけてやらないといけないね、そいつを痛い目にあわせるのならどんな策略であってもね！」しばらくすると、母親が（また）言いました、「ああ、かわいい娘よ、お前の旦那が今夜帰ってきたら、心臓が苦しい、あなたの留守中に激しい動悸がしたって、打ち明けるんだよ。そして、痛くてたまらないという泣き方をしながら、こう言うんだ、『わたしはあなたの言いなりだったから、こんなにひどく衰弱してしまったんだわ。だから、何としても[14] わたしのために薬を手に入れてちょうだい』ってね。もし旦那が、『どういう薬なんだ？　お前のためにそれをもってきてやろう』と言ったら、こう言っておやり、『男盛りの猿の心臓を処方されたのよ。もしそれが手に入らなければ、あなたの不安と悲しみが増すことになるでしょう、とも言われたわ』って。旦那がお前の望みを聞き入れてくれるまではやめちゃいけないよ」。それを聞いて奥さんは喜び、満足しました。久しい間、彼女はそうした思いを感じていなかったのです。

作者が言うには、夫が友だちの猿のところから帰ってくると、奥さんは地面に身を投げ出して激しくあえぎ、泣き、うめき苦しんでいました。彼はそばに歩み寄り、涙を流して言いました、「何があったんだ、何が起こったんだ？」すると、奥さんが言いました、「ああ、心から愛しいあなた、あなたが留守をしている間ずっと、わたしは歯を食いしばってうめいていたのよ。何か物音が聞こえてくると、不安でしかたなかったわ。だって、ひとりでじっとしていたんですもの。心安らかな時もなかったし、わたしを慰めてくれる人もいなかったのよ。悲しくなるたびに心臓の鼓動が激しくなって、ものすごく痛くなったわ。ひどくなっていくばかりだわ。きのうは死ぬ思いをしたから、もう最期のときが来たとしか思えないわ、もう死んでしまうのよ」。その言葉を聞いて夫は不安になり、涙を流して嘆き悲しみ、こう言いました、「どうしてほしいんだ、ああ、愛しいお前[15] ？　どんな薬が効くのか、言ってくれ、きっと手に入れてきてやろう、たとえヤマンの果てに[16] あってもな」。奥さんが言いました、「猿の心臓を処方されたんです。もしそれを食べないと、わたしは死んじゃうんです。だって、それがわたしの薬であり、わたしの欲しいものであり、わたしが治るかどうかはそれにかかっているんですもの」。それを聞いた夫は重苦しい気持ちになり、妻の死を望みました。その言葉を受け入れることができなかったのです。亀はひどく腹を立て、彼女のそばを離れて立ち去り、悲嘆に暮れ、当惑しながら、近所の者たちの間にすわりました。

---

[13]「言いました」の動詞語尾が写本では赤インクで記されている。

[14]「何としても」 min sabīliのbの文字が写本では赤インクで記されている。

[15]「愛しいお前」は底本（378/1）ではqul-īだが、写本（148b/18）によりqalb-īと読む。

[16]「ヤマンの果てに」 ヤマンは現在のオマーンからイエメンのあたりをさす。「世界の果て」ほどの意味であろうか。

さて、かなり経ってから戻って来て、娘が泣きわめいているのをみた母親は、近所の者たちのところへ行って嘆き悲しみました。娘婿（がそこにいるの）をみた彼女は、婿に対する不満を抑えきれなくなって、その前で泣きながら、こう言ったのです、「それが男たちのプライドってものなのね、妻や子供たちより猿を選ぶんだわ。そんなことをするやつなんか糞喰らえよ」。彼女はそのたびにあたりにいた者たちみんなを集めて、彼を知る者も知らない者も、彼につらく当たり続けたのです。いつ果てることもなく非難の言葉を浴びせ続けられた彼は、とうとう説き伏せられて、こう言ってしまいました、「近いうちにそれを持って戻って来てやるよ」。それを聞いたみんなは喜びました。彼が約束したので、待つことにしたのです。

さて、友だちの猿のところへ行く時間になると、すぐに急いで出かけ、つらい思いをしながら友だちのところへ向かいました。そして、到着すると、その前にすわって親愛の情を表わし、その友情を美辞麗句で飾って、こう言いました、「ああ、親愛なる友よ、時間はありますよね。あなたはわたしに友情を示してくださり、この場所のすばらしいところをすべて見せてくださいました。きのう、家で寝ていたときに、過ぎ去った日々のことを思い出して、わたしにも若い日々があったんだなと思ったのです。あちらにある島においでになりませんか、今ならすばらしいものや珍しいものが見られますよ。みんなが同じ種類や違う種類のくだものを持ってきてくれるんです。そこへわたしはあなたをお連れしたいのです。勝利者である唯一のアッラーを称える川や鳥たちをご覧になることができますよ」。その言葉のすばらしさに猿は驚いて、こう言いました、「そんな場所までどうやって行けって言うんですか､そことわたしの間には洪水のような海があるじゃありませんか？」すると亀は、うれしそうに言いました、「わたしが海に入ったのを見たら、わたしの背中に乗って、しっかりとすわってください。そうしたらわたしが、満々と水をたたえた海を横切っていきます、最初から最後までね。あなたを乗せて島々に立ち寄りながら行きますが、どんなに思慮分別を備えたひとでも、きっとびっくりしますよ」。そうした話を聞いた猿はその気になり、その勧めを聞き入れて、こう言いました、「先に進んでください！」こうして猿はその手中に落ちたのです。亀は猿が策略にかかったことを喜びました。

亀は（海に）下り、猿を背中に乗せると、そのまま波を横切って只中を進み始め、海の真ん中まで行って止まりました。猿が好意から自分にしてくれたことを思い出し、その友情を思って途方に暮れてしまったのです。その友情ゆえに猿と出会うことができたのに、妻が衰弱したという理由で、彼を虜にしてしまったからです。そこで亀は猿にこう言いました、「何のためにあなたをここまで連れて来たか、分かっていますか？」すると猿は、恐怖を感じながら、彼に言いました、「いいえ」。亀は言いました、「アッラーにかけて、あなたに言ったような事情ではなくて、わたしの妻のためなのです。妻は心臓で苦しんでいて、不安に駆られているんです。その苦しみを取り除き、長患いから解放するため

に、猿の心臓が処方されたのです」。

その言葉を聞いた猿は、驚きのあまりに心臓が激しく縮み上がったのですが、しばらくすると笑い出し、亀をだましてこう言いました、「あなたには分別もなければ、思慮もないんですね。わたしの心臓が、その下であなたと知り合った木に吊るされていることを、もしあなたが知っていたら、それとも、今の話を（もっと早く）わたしに教えてくれていたら、あなたが必要としているものをあらかじめ用意して、心臓を持って来てやったんですがねえ」。亀は、その当意即妙な言葉にすっかりだまされて、こう言いました、「ああ、わが兄弟よ、あなたの心臓はそこにはないと言うんですか？」そこで猿が言いました、「そうなんです、海に潮の流れを作り、空を高くし、そこにお祭り騒ぎのように巡る星々をともし、数々の徴候を現わし、光を輝かせたお方にかけて、ほんとうにわたしの心臓は、あなたと友だちになった木にかけてあるんですよ。ですから、戻ってください、そうしたらわたしの心臓を差し上げますから、それであなたの必要なものは手に入るし、あなたの奥さんも満足するでしょう！」

それを聞いた亀は、猿の言葉を本当だと信じ、その振舞いを思いやりに満ちたものだと思って、戻って行ったのです。猿を乗せて（泳ぎ）続け、やがて海岸に到着しました。すると猿はその背中を蹴って、陸へと突っ走りました。心は喜びと満足と幸せと歓喜に満ちていました。そして、亀に向かってこう言い放ったのです、「おい、生き物の中で最も下劣なやつめ、仲間に禍をもたらすとんでもないやつめ、お前は友情から出た振舞いに、恥知らずで下劣な振舞いで報いたのだ、今来た道を帰れ、必要なものは手には入らない、友だち付き合いもこれでおしまいだ」。

「そういうわけですから、わたしはアッラーが亀から猿を助けてくださったのと同じように、アッラーがわたしをあなたの大臣たちから助けてくださるものと思っているのです」。

それを聞いた王は、息子を処刑するよう命じた。

すると、第六の[17] 大臣が王のもとにやって来て、御前の床にキスをし、こう言った、「ああ、王様、御承知のようにあの御子息は、苦しみ悩み、哀願し懇願して、やっとのことでアッラーから授かったのですぞ。それをもう、思慮分別も信仰も持たぬ女のためにうとんじなさるのですか。そのようなことをなされば、あの鳩が後悔したように後悔することになりますぞ」。

王が言った、「その鳩の話[18] とはどういうことだ？」

彼は語った、「ああ、王様、

[17]「第六の」は写本では赤インクで記されている。

[18]「鳩の話」は底本では次の物語のタイトルとして扱われているが、その内容および写本により、王の科白の一部と解釈する。

（16　第六の大臣の第一の物語　雉鳩Ⅰ　turturesⅠ）

雌雄二羽の鳩がいたということです。巣の中に小麦や大麦をせっせと集めていました。やがて巣がいっぱいになると、雄が雌にこう言いました、「この穀物に手をつけちゃいけないぞ、一粒たりとも触れてはいけない、冬になったらこれで食いつないでいくんだからな」。すると、雌が言いました、「ええ、分かったわ」。ところが、暑さが激しくなって小麦が乾燥してくると、（見かけの量が）目減りしてきたのです。

ある日のこと、（巣に）やって来た雄は、それが減っているのを見て、雌にこう言いました、「これに手をつけるんじゃないって、お前に禁じておかなかったか？」彼女は（食べたりなんかしてはいないと）誓ったのですが、雄は彼女の言うことを信じようとせず、いつ終わることもなくつつき続けたので、とうとう彼女は死んでしまいました。彼はひとりぼっちになってしまったのです。

ところが、冬になると穀物が膨れてきて、巣は以前と同じようにいっぱいになりました。その様子を見た雄の鳩は、不当にも雌を殺してしまったことを知って後悔したのですが、それも何の役にも立たず、どこにいても彼女のことを嘆き始めたのです。

「私は、王様、雄の鳩の身に起こったのと同じようなことが陛下の身にも起こるのではないかと心配しているのです。そんなことになりましたら、ただ今の鳩が後悔したように後悔することになるのですぞ。さらに、女たちの策略についても物語[19]を聞き及んでおります。こう言われています。

（17　第六の大臣の第二の物語　ケーキの象　elephantinus）

男がある女と結婚していました。女は、日々のうちのある日のこと、夫のために鶏の挽き肉で食事を作り、それを籠に入れて、夫のもとへと運んでいったのです。道を半分行ったところで、無頼のやからである七人の男たちに出くわしてしまいました。女が愛らしくて美しかったので、彼らは女を運んで空き地へと連れ去り、欲望を満たして楽しんだばかりか、女が籠に入れて持っていたものも食べてしまったのです。ところで、彼らの中に、獣や鳥などの姿かたちを上手に形作る男がひとりいました。彼が甘いデザートを手に取り、それで象の形を作って、女には何も言わずにそれを籠の中に入れておいたのです。

女は夫のもとへ行き、夫が籠のふたを取りました。その中に象の形をしたものが入って

[19]「物語」は底本では次の物語のタイトルとして扱われているが、その内容および写本により、大臣の科白の一部と解釈する。また、写本では赤インクで記されている。

いたので、夫が言いました、「何だ、これは？」すると、女はすぐさま、言いよどむこともなく、こう言ったのです、「夕べね、眠っていたときに、象があなたを食べちゃう夢を見たのよ。それを夢占い師たちに話したら、『ご主人のために甘いもので象を作って、それを食べさせなさい、そうすればご主人は災難に遭わないで済みますよ』って言われたの」。夫はそれに感動し、何と誠実な女なのだと思いながら、それを食べたのです。

「ああ、王様、そういう策略を使って、彼女がどのように言い逃れたのか、どんなことをでっち上げたのかを、お考えになってください。彼女に罪はありませんが、判断を誤ってはなりません[20]。女たちが口にするのはいつも嘘であり、偽りなのだということを御承知いただきたいのです」。

それを聞いた王は、息子の処刑を延期した。

かくして

七日目[21]

が明けると、妃はこう言った、「今日、あの若者が口をきく前に殺してしまわなければ、きっとわたしのことを暴露して、わたしを殺そうとするに違いないわ」。

しばらくして彼女は、持っていたものをすべて手にとり、それを人にやってしまうと、わたしのためにたくさんの薪を手に入れて来てちょうだい、と命じた。彼女たちがそれを手に入れてくると、彼女はそれに火をつけて、その中に飛び込もうとした。それを聞いて王が言った、「焼身自殺する前に妃を救い出せ！」そう言うと王は、息子を処刑するよう命じた。

すると、第七の大臣がやって来て王を訪れ、こう言った、「王様、女のために御子息を処刑するのは間違いです。女たちのずる賢さとたくらみについては、私の耳に届いている物語[22]がございます」。

（18　第七の大臣の物語　女たちの悪知恵 I a　ingenia Ia）

ある男がこう言いました、「女たちのずる賢さや策略を（残らず）書き留めるまでは結婚しないぞ」。すると、男たちが彼に言いました、「そんなこと、できっこないさ。女たち

[20]「判断を誤ってはなりません」に底本では疑問符が付されているが、問題はなさそうである。
[21]「七日目」は写本では赤インクで記されている。
[22]「物語」は底本では次の物語のタイトルとされているが、その内容および写本により、大臣の科白の一部と解釈する。また、写本では赤インクで記されている。

のずる賢さや策略の二四分の一[23] だって、集めることなんかできないよ。偉大な卓越した創造主（バーリ）[24] だって、女たちの手練手管には一目置いているんだからな」。男は言いました、「力の及ぶ限り書いてみるさ」。

それから男はいくつもの町、国々、荒野や僻地を訪れては女たちの策略を書き留め、ついには大旅行を成し遂げて帰途についたのです。もうたくさんのことを理解したと思ったからでした。

ある道を歩いていると、アラブ人たちの地区があり、男が彼らに、泊めていただけませんかと頼むと、彼らの長官（アミール）が男を客として迎え入れ、客好きな人たちの間にすわらせてくれました。みんなは男を愛想よくもてなし、どこから来たのか、それはどういう理由があってのことなのかと質問しました。男は、自分はどこそこの国からやって来た者で、一族の者たちから結婚してはどうかと尋ねられたので、あらゆる村や町や国を巡り歩いて、女たちの策略を（残らず）書き記すまでは結婚はしないと誓ったのです、それからすべての国々を旅して回り、女たちの策略をすべて書き留めたので、今は家族のもとへ帰って結婚しようと思っています、女たちの策略で自分に残されているものや隠されているものはもう何ひとつないのですから、と説明しました。すると、その地区の長官が彼に言いました、「あなたは、女たちの策略の二四分の一（キーラート）も理解してはいませんよ。なぜなら、完全にして至高なるアッラーが、女たちのたくらみはひどいものだ[25]、と言っているのですからね」。

そう言うと彼は妻に、男が休む所を用意してやりなさい、旅のあとでくたくたに疲れているだろうからね、と命じました。それから彼を妻のもとに連れて行くと、長官自身は

---

[23]「二四分の一」　少し先にもキーラートとして出てくる。「ほんのわずか」という意味で使われているものと思われる。仏典には『六度集経』六八「童子の本生」に「ほんのわずかな金（銖両の金）でも隠したりすれば」という表現で銖（両の二四分の一）が出てくるが、多く見られるのは一六分の一である。早くは『リグ・ヴェーダ』八・四七・一六に見え、『マヌ法典』二・八六には「一六分の一にも値しない」、『ラーマーヤナ』五・一六・一四には「十六分の一にも及ばない」という表現があり、仏典にも「一六分の一にも及ばない」という表現が随所に見られる（『ジャータカ』三六一「みめみのたけ前生物語」と五三一「クサ王前生物語」、龍樹＜鳩摩羅什訳＞『大智度論』第一一巻。『衆許摩訶帝経』第七巻三四、第一一巻六一、これは宋の法賢が九八五から九九五年の一〇年間に訳したチベット系の仏伝である。九八五年の源信『往生要集』にも『正法念処経』二三＜五一六年以降＞、『仏説出生菩提心経』＜六世紀後半、闍那崛多訳＞、『大乗理趣六波羅蜜多経』からの引用がある。一一八八年以降の成立とされる平康頼『宝物集』巻四「発菩提心の功徳」の項に『仏説出生菩提心経』からの引用がある）。「十六は別々の部分が完全に合一したことを示す数としてバラモン教で古来重要視されて」いるもので、「絶対者ブラフマンは合計十六分の一が十六合して構成されているという教えが古ウパニシャッドに説かれて」おり、「西暦後のサンスクリット復興時代に」仏教に流入した。この「十六分の一という観念は月の盈満から来たものであるらしい」という（中村元・早島鏡正・紀野一義訳注『浄土三部経（上）』岩波文庫、一三〇ページ、「ドゥシプラサハ如来」への注より）。

[24]「創造主（バーリ）」はbara'a「創造する」から派生した名詞で、九九あるとされる神の美称のひとつ。『コーラン』二「牡牛」五四、五九「追放」二四に見える。

[25]「女たちのたくらみはひどいものだ」『コーラン』一二「ユースフ」二八に、「そこで調べて見ると襦袢は後ろからひき裂かれていたので、（主人）は、『ははあ、お前ら女どもの悪るだくみだな。いや、まったくお前らはひどい悪るだくみをするものだなあ』と言った」（井筒俊彦訳）とある。

親類のところへ行ってしまったのです。そういうわけで長官夫人が男のそばにやって来て話しかけ、いちばんの食事を出し、親切にもてなしました。それで男は、集めた女たちのずる賢さの中からいくつかを彼女に話して聞かせたのです。夫人はほほえみ、こう思いました、「これはもう、この人が集めて書き留めたものの中にない策略を仕掛けてやらなきゃだめだわ」。そして彼女は男を見詰めてほほえみかけ、笑い、やがて大声で笑い出して、こう言いました、「ああ、いいチャンスだわ[26]、都会の人よ、あなたがたは秘密を守れるんですか？」男が言いました、「もちろんですとも、少なくとも私はあなたの秘密を守ります、あなたの事情を洩らすようなことは決してしません」。すると彼女はこう言ったのです、「実はね、この地区の長官をしている夫のことなんです、あの人、わたしの従兄なんですけど、もう年を取った老人で、あらゆる面で力強さが足りないんです。でもわたしは、ごらんのように若い女です。情欲は大いにあるし、子供もほしいと思っているんです。でもね、スキャンダルになるのが恐くて、一族のだれかに身をまかせることはできないの。わたしの心はもうあなたのもの、あなたの愛情も試したから、あなたがわたしの愛人になってくれるなら、わたしは承知よ。あそこ（ファルジュ）はきゅっと締まっているし、情熱や思いやりといい、裸で戯れあうテクニックといい、都会の女たちからは味わったことのないものを味わえるわ」。

そう言うと彼女は両脚を伸ばして、露わにしたのです。男は欲情をそそられ、彼女の魅力と美しさを目にして、こう言いました、「すばらしい」。彼女がその体を男にあずけると、男はその両脚の間に入り込みました。一物がいきり立ち、まさに彼女に挑みかかろうとしたとき、彼女は両脚をぴたりと合わせ、男を蹴り、仰向けに投げ飛ばして、大声で叫んだのです。彼は何が何だか分からなくなって恐くなり[27]、一物をいきり立たせたまま横たわっていたのですが、やがて、恐怖のあまりに気を失ってしまいました。

彼女の夫が悲鳴を聞きつけました。彼女は立ち上がると、急いで男をすわらせ、水をかけました。そのとき夫が入って来て、彼女がそういうことをしているのを見つけたのです。彼はその理由を尋ねました。すると彼女はこう言ったのです、「ああ、あなた、わたしたちのお客さまがお腹をすかせていて、がつがつと食べて、ほおばったひと口が大きすぎたものだから、窒息しそうになってしまったのよ。死んでしまうんじゃないかと思うと恐かったのよ」。すると彼はこう言いました、「なあ、お前、気をつけて食べさせてくれよ、あわてさせないでくれよな」。そう言うと彼は出て行ってしまいました。

すると彼女は客に近寄って、こう言ったのです、「あなたはいろいろな国を旅して、いろいろな人とつき合い、たくさんのお金を遣って、女たちの策略を書き留めたのよね。ところで、今のようなことは、あなたの書いたものの中に書いてあるの、それとも、もう知っていた？」

[26]「いいチャンスだわ」に底本ではテキストに疑問符が付せられているが、問題はなさそうである。
[27]「恐くなり」に底本ではテキストに疑問符が付されているが、問題はなさそうである。

男は言いました、「いいえ」。それを聞いて彼女が言いました、「アッラーに誓って、わたしは好色な女なんかじゃないわ、夫を裏切ったりもしない。あなたと会って、あなたが今までしてきたことを（誇らしげに）話したり[28] しなかったら、こんなことはしなかったわ。あなたが、女たちの策略については何も分かっていないってことを、教えてやりたかったのよ」。

やがて男は、彼女のところから出て、自分がしてきたことを後悔しながら、家族のもとへ帰って行ったのです。

「そういうわけですから、王様、もしただ今のような振舞いが良い振舞いだというのであれば、不誠実な女たちの振舞いがいかばかりのものであるのかを、よくお考えになっていただきたいのです。ただ今のお話で、ああ、王様、女たちの策略がひどいものだということをお分かりいただくためでなければ、お話などはいたしませんでした」。

すると王は息子の処刑を禁じた。

＜（八日目）王子が口を開く＞

彼（作者）は言った[29]。かくして朝になると、王子が口を開いて言った、「ありがたい！」それから王子は、この七日間、食べ物や飲み物を用意するために仕えていた女奴隷に、こう言った、「年長の大臣のところへ行って、来るように呼んできてくれ」。

その言葉を聞いた女奴隷は、大臣のところへ行って、こう言った、「王子さまがあなたさまに来てくれとおっしゃっています」。すると大臣は喜んで立ち上がり、大急ぎで走り出した。

そして、（王子に）会うと、彼を抱きしめ、しばらくしてからこう言った、「ああ、御主人さま、これまでの日々、あなたが口をきくのを妨げていたのは、いったい何だったのですか？」すると王子が言った、「わが師である賢人シンドバードの命令によって禁じられていたのだ。私のことで嘘をついた女は、まるで私が望んででもいたかのように私を誘惑したのだが、私は彼女を拒んで言いなりにはならなかったものの、師であるシンドバードの命令を忘れて、『アッラーに誓って、七日間が過ぎ去ったら、必ずやむごたらしい死に方をさせてやるぞ』と言ってしまったのだ。私がそう言うと、彼女は私を殺すことをたくらんだのだが、至高なるアッラーが彼女の策略から私を救ってくださったのだ」。

その話を聞いた大臣は大喜びし、王のもとへと急いで、こう言った、「吉報をお持ちいたしましたぞ、ああ、時代の王よ、御子息が口を開かれて、話すことを妨げていた理由を私に教えてくださいましたぞ」。すると王は喜んで、こう言った、「連れて来い！」

---

[28]「話したり」の動詞語尾が写本では赤インクで記されている。
[29]「言った」の動詞語尾が写本では赤インクで記されている。

（大臣が）王子を連れて来ると、彼に会った王は抱きしめて涙を流し、こう言った、「おお、息子よ、この七日間、話すことを妨げていたのは何だったのだ？」王子が言った、「わが師シンドバードが、七日間口をきかぬよう、さもなくばその間に命を落とすことになります、と命じて禁じたのです」。それに引き続いて王子は、（王妃である）女奴隷との間に起こったことを物語り、彼女が話を持ちかけてきたので、殺してやるぞと脅したら、彼女はすでに御承知のような振舞いに出たのです、と言った。それを聞いて、王は王子を大いにほめたたえた。

それから王は、学者や賢人や大臣たちを集めて、息子の身に起こったことを知らせ、シンドバードを呼び出すと、王はこう言った、「何がそちをそうするように仕向けたのじゃ？」シンドバードが言った、「陛下が御子息に戻って来るよう求めたときに、御子息の星を調べたのです。すると、その星の中に、もしその後の七日間に口をきいたら、その身に禍が起きる、その間に彼の死が訪れる、と出たのです。そのことが私を苦しめ、それを陛下にお知らせすることと、真実を述べろと求められることを恐れたのです。それで、七日間が過ぎ去るまでは決して口をきかないようにと、命じたのです。それに、御子息がとりわけその間に命を奪われるようなことはないと分かっていましたし、何よりも陛下にはこの大臣たちがいたのですから」。それを聞いて王が言った、「ありがたい、アッラーがわしのために息子をお守りくだされたのだ」。

それから王は、大臣たちに贈り物をすると、息子にこう言った、「アッラーがそなたに教えてくれたことをわしに聞かせて、わしの喜びを完璧なものにしてくれ！」王子が言った、「喜んで！」

それから王子は、コーランの（章句を）いくつか朗誦し、天に書き留められた王の所業や、自分の母親や、彼を教育した者や訪れてくれた者の、天に書き留められた所業を示し、さらに学問や英知について教えたので、聞いている者たちは理解できずに混乱してしまい、まわりにいる者たちも、何が何だか分からなくなってしまった。そこで、学者や法学者、賢者たちはそのことを認め、太鼓判を押して、こう言った、「この時代に、御子息よりもよく知る者はおりません」。

すると、王子がこう言った、「アッラーに誓って、私の知識など、ここにいる皆さんの知識に比べたら、一粒の芥子種[30] のようなものにすぎません、彼らに導かれてすばらしい教育

[30]「一粒の芥子種」　第一八話に出る「二四分の一」（訳註23参照）と同様に「ほんのわずか」「取るに足らぬもの」であることを表わす。『ジャータカ』五四三「ブーリダッタ竜王前生物語」に、「シネール山の前の芥子粒のよう」だという表現があり、ブハーリー『ハディース』「信仰の書」一四（一）には、「心の中に芥子種一粒ほどでも信仰をもつ者があれば、地獄から出してやるように」という神の言葉がある（牧野信也訳）。芥子の種は種のうちでいちばん小さいものとして『新約聖書』（「マタイ」一三・三二、「マルコ」四・三一、「ルカ」一三・一九）にも出てくる。特に「ルカ」一七・六の表現は、『ハディース』の前半の表現とそっくりである。『トマスによる福音書』二〇にも「一粒の芥子種……はどんな種よりも小さい」とある。この福音書はマニ教徒の手を経て、アラブ世界に伝わった可能性がある。

を受けたのですから。それに、ひとりは三歳で、もうひとりは五歳の、二人の男の子のことと、盲目の老人のことを聞いたことがありますが、その三人の者たちは私よりも知識があります」。

すると、王が言った、「その者たちのことを話してくれ」。

「こういう話です、王様」。

（19　王子の第一の物語　三歳の男の子　puer 3 annorum）

美しい女がいるという噂を聞くと、誘惑せずにはいられない男がいました。そして、美しい女がいると聞いて誘惑したのですが、女が言いなりにならなかったので、思いのままにすることはできませんでした。それでもなお、老婆や葬儀のときの泣き女たちを使って誘惑し続けたので、とうとう近づきを得て、女の家を訪れたのです。それでも女は、スキャンダルを恐れて、話をしませんでした。女には三歳になる息子がいました。それで、女はこう言いました、「子供のために、何か食べるものを作らせてください、この子はお腹をすかせているんです」。すると、男が言いました、「おれたちがすることをしてしまうまで（待てよ）」。女が言いました、「それはぜったいにできないわ。この子は完全にして至高なるアッラーと関わりがあって、かわいがられているのよ。だから、この子が欲しがるものを作ってしまうまで、自分のことはできないわ」。

それを聞いて男が（ひとまず）思いとどまったので、女はすぐに立ち上がって、米の料理を作り、出来上がるとそれをお茶碗によそって、幼い息子の前に置きました。すると、男の子がこう言ったのです、「これじゃ足りないよう、もっとちょうだい！」母親がさらにあげたのですが、男の子は泣いて言いました、「これでもまだ足りないよう、それに砂糖とバターを入れてちょうだい」。そこで母親は言われたものを作ってやったのですが、（子供はまた）泣いて、こう言いました、「バターと砂糖をもっと入れてちょうだい！」彼女がさらに入れてあげたのに、男の子はまだ泣いていました。すると、男がこう言いました、「殴るぞ、このがきめ、お前よりバカなやつは見たことがねえ」。男の子が言いました、「そんなこと、ぜったいにないよ、ぼくよりもバカで、何も分かってないひとがそこにいるじゃないか！」男が言いました、「そりゃ、だれのことだ、このクソがきめ！」（男の子が）言いました、「自分の家からやって来て、いやらしいことをしようと言って、自分のものを無駄遣いして、許されていることでは満足しない人のことだよ、そういうことにちっとも飽きたりしないし、いやなことばっかりして、何の役にも立たないし、不愉快な思いをさせる人のことだよ。ぼくのことをバカだって言うけど、ぼくのどこがバカなの、泣いても、ぼくには何の役にも立たないって言うの？　ぼくの目から出る涙はぼくの目を治して役に立ってくれるし、鼻から出るやつはぼくの頭を治してくれるんだよ。それに、もし少なかったら、泣けばお米やバターやお砂糖以外にももらえて、たくさんになるんだ」。

男は、その男の子の言葉が賢者の言葉であり、警告であることを悟って、そのそばへ行き、女遊びをしていたことを後悔しながら、その頭にキスをしたのです。

王は息子の話を聞いて大喜びし、称賛に値すると言ってほめたたえた。その場にいる者たちも（同じであった）。王子は話を続けて言った、「五歳の男の子については、こう語られています。

（20　王子の第二の物語　五歳の男の子　puer 5 annorum）

三人の男たちが共同で商品を扱い、いっしょに旅をしながら、ある町へとやって来ました。知り合いの者がその町にはいなかったので、彼らはある老婆のところに宿を取り、お金を預けて、こう言いました、「おれたちが三人そろうまでは、この金をおれたちの誰かひとりにぜったいに渡してはいけないよ」。

それから彼らは、体を洗いに風呂（ハンマーム）へ行きました。櫛を探したのですが、なくしてしまっていました。そこで彼らは仲間のひとりを送り出し、(残りの二人は) 彼を見張っていました。彼は老婆のところへ行き、こう言ったのです、「あの金をおれに渡してくれ！」彼の仲間の指図を忘れてしまった老婆がそれを渡すと、彼はお金を受け取り、立ち去ってしまいました。

仲間が風呂から老婆のところにやって来て、仲間のことを尋ねました。老婆は言いました、「わたしのところへ来て、お金を受け取って立ち去っていったよ」。それを聞いて彼らが言いました、「おれたちはお前に、おれたちがそろってくるまではおれたちの誰かひとりに何も渡すなって言わなかったか？」彼女は（責任を逃れようと）こう言いました、「わたしはそんな話は聞かなかったよ」。

すると彼らは老婆を裁判官に訴えて、お金を（返すよう）要求したのです。老婆が（事実関係を）認めたので、裁判官は彼女に返金義務を課し、命じました。

それを聞いて、泣きながら外に出た老婆は、ひとりの男の子に会いました。その子が彼女に言いました、「どうしたの、ねえ、お婆ちゃん？」老婆が言いました、「話しかけたりしないで、そっとしておいておくれ！」ところが、男の子は話をするようせがんで、こう言ったのです、「ぼくが助けてやったら、甘いお菓子をくれる？」彼女が言いました、「いいわ」。男の子は言いました、「裁判官のところに戻って、お金はお婆ちゃんのところにある、でも、あの人たちは、仲間がその場にいなければ、そのうちのだれにも渡してはいけないとわたしに命じた、あの人たちが三人そろってやって来たら、お金を渡す、って言うんだ」。

老婆は、男の子に言われたとおりにして放免されたのです。その子は五歳の男の子でした。

「盲目の老人のことは、こういう話です」。

（21　王子の第三の物語　盲目の老人　senex caecus）

ひとりの愚かな男が商品を持って旅立ち、ある国にやって来ました。そこにはやくざな者たちがいて、男に近寄ると、その商品をひっくり返しました。目の前でその商品価値を落としてしまうと、男と取引きをして、金でも真珠でも貴金属でも、あるいは何でも彼が選ぶもので欲しいもの一サーア分[31]と交換でそれを買い取ることに決め、彼をその証人としたのです。

そういうわけで、一サーア入る容器を持って来るためにその場を離れた彼は、商人たちのひとりと出会って知り合いになり、挨拶を交わしました。その男が彼に商品について尋ねたので、彼は説明し、それを宝石あるいは自分が選ぶものの一サーア分と交換に売ったと言いました。すると男はそのことで彼を叱責して、こう言ったのです、「あなたの商品は、これこれこういうものに等しい価値があるのですよ」。

それを聞いて、泣きながらその場から離れた彼は、すでに年老いた盲目の男と出会いました。老人が彼に言いました、「どうしなすったのかね、わが息子よ？」何が起こったのかを説明し伝えると、盲人は笑って、こう言ったのです、「喜びなされ、お前さんの喜びはすぐそこまで来ているよ！　もちろんお礼はくれるんじゃろうね」。そこで彼は、もし私を助けてくれたら金貨（アシュラフィー）を百枚（差し上げましょうと）約束しました。すると、盲人はこう言ったのです、「一サーアの容器を持って奴らのところへ行き、こう言うんじゃぞ、『口が赤くて、緑色の羽の、黒いノミが欲しい』とな。そんなことは奴らにはできっこないからのう」。

さっそく彼は一サーアの容器を手に取ると彼らのところへ行きました。すると、彼らが言いました、「何を選んだんだい？」男は言いました、「赤い口をしていて、緑色の羽があり、脚が麻痺している黒いノミを一サーア分欲しい！」彼らは言いました、「冗談はやめてくれ、何でもいいからお前が欲しいものを言ってくれ！」男は言いました、「それ以外のものは欲しくない、それができないのなら、私とあなたがたの間に裁判官（を立てよう）」。

こうして彼らは裁判官のところへ行き、（やくざな者たちは）男に取り消しを求めたのです。けれども彼は承知しませんでした。そこで彼らが相当な額を追加して与えたので、やっと男も満足し、（商品の）価値に相当する額を受け取ったのです。

作者の言うところによれば、息子の詳細な話に感動した王は、彼の両目の間に[32]キスをし、それから、息子に対して嘘をついた奴隷娘を連れてくるよう命じた。彼女が姿を現

[31]「サーア」は穀物の重量単位。時代や地方によって異なるようだが、近代エジプトで換算すると約二・四キログラムに相当する。

[32]「両目の間に」は底本（387/19）では‘aynay-hi「両目に」であるが、写本（153b/6）によりbayna ‘aynay-hiと読む。

わすと、王がこう言った、「お前はなぜあのようなことをしたのだ？」彼女が言った、「ああ、ご主人さま、悪魔（シャイターン）と愛欲（のせいだったのです）。ですが、すでに至高なるアッラーが真実を明らかにしてくださいました」。

それを聞くと、王は周囲に控えている賢人や学者たちのほうを見て、こう言った、「この女はどうすればいいであろう？」すると、誰もがみな、この女には報復を加えるべきであると要求した。それを聞いた王子は、何も言わなかった。それで、父親がこう言った、「何か言うことはないのか、息子よ？」すると、彼は言った、「彼女を赦していただきたい、というのが私の意見です。なぜなら、今回のできごとは、私に運命づけられたものだったからです。私は災難に遭いはしましたが、アッラーがこの女を通して、もっと悲惨な結末を私から遠ざけてくださったのです」。

それを聞いて、学識経験の豊かなある学者がこう言った、「敵に対し（そのように）お心をお決めになりましたこと、その度量を称賛いたします。私は、すでに彼女を赦しましたことを、皆さまに証言いたします」。すると、王が言った、「わしも、わが息子をわしに代わって統治者に任命したことをそなたたちに証言し、わしは退位することにしよう」。そう言って、息子に王冠をかぶせ、玉座にすわらせた。

かくして彼は、喜びの破壊者が訪れて、人々の間に別離をもたらすまで、正義と公正によって人々を統治した。

（物語の結び）

これが、王冠を戴く王とその息子と賢人シンドバードと父の奴隷娘と七人の大臣たちの物語、および彼らがそれぞれに、欠けることなく完全に語った物語である。私たちはアッラーのお力によってつまずきや過ちから立ち戻ってくる。唯一なるアッラーに称えあれ。そして、われらの主人であるムハンマドと、その家族と、彼に従う者たちに、アッラーが祝福と平安とをお与えくださいますように。[33)]

（写本筆写者の覚書）

（イスラーム暦）九四〇年の月々のうちの良き月であるサファル月（第二月）の始めに、いと高き神を乞い求めるしもべ、（他に何ものをも必要とせずに自ら）存在し、すべてを受け入れてくださる全能なる主の赦しをこいねがう者、イブン・アブドゥッラー・アッ＝サイフィー・アールグーン・シャー・アル＝ジルバービーの手によって書写が完了した。慈悲と喜びで彼ら（ムスリムたち）を満たしたまえ。広々とした天の楽園に彼らを住まわ

33) （　）内の「物語の結び」は訳者による補足の見出しで底本および写本にはない。この段落の「唯一なるアッラーに称えあれ」までは、この物語の写本タイトル･ページ（134a）に赤インクで記されているこの物語のタイトルとほぼ同じ内容である。前稿の脚註の冒頭を参照。

せたまえ。アーミーン、おお、諸世界の主よ。[34]

[34]（　）内の「写本筆写者の覚書」は訳者による補足の見出しで底本および写本にはない。この覚書は物語本文と同じではあるが、やや乱雑な筆跡で、本文と途切れなく書かれている。イスラーム暦九四〇年は、西暦一五三三年七月二三日から一五三四年七月一二日までで、この年のサファル月（第二月）は一五三三年八月二二日から始まる二九日間であるので、その「始め」、すなわちこの写本が写されたのは一五三三年八月下旬に当たると見ていいであろう。筆写者「イブン・アブドゥッラー・アッ＝サイフィー・アールグーン・シャー・アル＝ジルバービー」については未詳。「アールグーン」は「アルグーン」のほうが普通のようであるが、底本・写本ともに長音符がつけられている。阿久津正幸氏によると、アッ＝サイフィーは「剣を持つ者」のような意味で、トルコやモンゴル系の軍人が流入した影響で、西暦一一世紀（ヘジラ暦五世紀）頃からよく見かけられるようになった名称であるという。アル＝ジルバービーは「幅広の外衣を身にまとった者」の意味であろうか。「受け入れてくださる」にあたる語li-l-qubūli（388/15）は写本（153b/22）では判読が難しく、底本では疑問符が付せられている。校訂者A・アーテシュは解題八ページの脚注でこの語を省略して引用しており、「受け入れてくださる」という訳が正しいか否かには疑問が残っている。

なお、写本の最終ページ（153b）の右側欄外に、校訂者アーテシュがひと言も言及していない次のような詩が六行にわたって書かれている。本文と同じ筆写者による書き込みと思われる。判読に当たっては阿久津正幸氏の協力を得た。

أيظلمني الزمان وانت فيه وتاكلني الضباع
وانت ليث ويروا من جنابك كل ضامي واعطش
في حماك وانت غيث ملات الارض يا مولاى عدلا ومهدت البلاد
كما اشتهيت فمثلك من يزيد
الظلم عني ولا عتب
علي ادا استكيت

これを詩の形に書き換えると、次のような四行から成る詩になる。

أيظلمني الزمان وانت فيه　　وتاكلني الضباع وانت ليث
ويروا من جنابك كل ضامي　　واعطش في حماك وانت غيث
ملات الارض يا مولاى عدلا　　ومهدت البلاد كما اشتهيت
فمثلك من يزيد الظلم عني　　ولا عتب علي ادا استكيت

この世が私を虐げるのか？　あなたがそこにいるというのに。
　ハイエナどもが私を食らうというのか？　あなたが獅子だというのに。
渇く者は皆あなたのそばにいて喉の渇きを癒している。
　なのに、あなたに守られている私が渇きに苦しむというのか？　あなたが豊かな雨だというのに。
あなたは、ああ、わが主君よ、大地に正義を行き渡らせ
　望むとおりに国を治めた。
ところがそのあなたが私への不正を増しているのだ。
　だから私が不満を訴えても、私には何の咎もない。

この訳の一行がもとの詩の半句に相当する。この最初の二行（訳の四行分）は『アラビアン･ナイト』第三四夜～第三八夜「ヌールッ・ディーン・アリーとアニースッ・ジャリースの物語」の第三五夜にある（前嶋信次訳平凡社版第三巻三六ページ。阿久津正幸氏の御教示による）。これは『アラビアン･ナイト』の最古の写本を校訂したM・マハディー版の第二一一夜（四五三ページ）にも見え、二語異なるが、意味はほぼ同じである。『アラビアン･ナイト』からの引用のきわめて古い貴重な一例であると言える。後半の二行（訳の残り四行分）も、どこかからの引用と思われるが、今のところ出典は未詳である。

*　　*　　*

◎底本（アーテシュ版）の本文修正

底本（アーテシュ版）		写本（Şehid ‘Ali Paşa 2743）	
351/10	اجتهاد	136b/9	الاجتهاد
351/10	على العباد	136b/10	على العباد والبلاد
352/7	فطاز	137a/13	فطار（ز の上の点は茶系の色――文字は黒――なので紙のしみと思われる。この脚注は不要となる）
355/3	عنفها	138b/13	لا عنفها （この脚注は不要となる）
355/19	امرته	139a/9	امراته
360/13	قد	141a/4	وقد
361/3	قفخه	141a/11	قفتحه
364/18	المدنيه	142b/10	المدينه
365/3	انفسم	142b/15	انفسهم
365/5	يده	142b/16	يديه
369/4	كيف	144b/7	وكيف
370/10	على	145a/12	علا
370/12	الشجر	145a/14	الشجرة
374/15	وقالت	147a/15	فقالت
375/6	قالو	147b/5	قالوا
376/18	وبصبحتك	148a/13	وبصحبتك
378/1	قلى	148b/18	قلبى
384/4	اما	151b/18	واما
386/12	الى حمام	153a/2	الي الحمام
387/19	عينيه	153b/6	بين عينيه

◎底本脚注の修正と追加（本文修正の352/7, 355/3を参照）

底本（アーテシュ版）		写本（Şehid ʻAli Paşa 2743）	
354/12	تزد	138b/1	تزده
357/6	عدو	139b/10	عدوا
364/f.n.15	معادا	142b/6	معاذا
370/5	اعلى	145a/6	اعلا
372/20; 373/1	التاجر	146a/18, 20	الناجر
380/3	ودخل على الملك	149b/22-150a/1	ودحل علي علي الملك
381/21	جزا（× 2）	150b/12	جُزا（× 2）
382/15	لاعمل	151a/6	لا اعمل
385/f.n.3	واجازوها	152a/19	واجاروها
385/f.n.19	19 → 18		
386/f.n.15	فجا واصحابه	153a/4	فحاو اصحابه
388/12-13	والحمد ... وسلم	153b/20	この間疑問符が付けられている単語はないが難読で、アーテシュの転写通りなのかは判断できない。

以上